

沖縄陶芸の里

1682 年、琉球王国は三ヶ所にあった主要な窯を、今日では壺屋として知られている首里城近くの地域に移動させました。この場所は、沖縄の陶芸の中心地となりました。陶器職人は瓦に加え碗や湯呑み、猪口、泡盛の保存にも使われる壺など幅広い品物を作りました。保存用の容器は壺と呼ばれていることから、その地域には壺屋という名前がつけました。

琉球王国の統治下では、壺屋は主に日常に使う陶器を生産しました。おそらく富裕層は中国から輸入された陶磁器を買っていました。琉球王国が日本に併合された 1879 年以降、日本本土への泡盛の輸出が急増し、壺屋も栄えました。1900 年頃には、壺屋にそれぞれ一度に 1,000 個の泡盛の甕を焼成できる窯が新たに 30 基建設されました。

壺屋焼は、2 つのタイプに大別できます。荒焼（あらやち）は素焼き、もしくは泥釉かマンガン釉がかけられています。荒焼は通常、水、泡盛、醤油、味噌を保存する甕など、大型の入れ物です。上焼（じょうやち）は釉薬がかけられており、深鉢や急須などの日常用品や、泡盛をお酌したり飲んだりするのに使う装飾的な容器や杯が含まれます。

壺屋は、第二次世界大戦で損壊を免れた那覇市に数少ない地域のひとつでした。戦後、壺屋の陶器職人たちは、そのほかの那覇の住民と一緒に拘留されましたが、彼らが作る陶器製品は日常生活に必須のものと認められたため、ほかの住民より先に帰宅が許され、仕事を再開できました。薪を燃料としていた壺屋の窯は、新たな汚染対策の規制が定められた 1970 年代まで使われ続けました。それ以降、一部の陶器職人はガスを燃料とする窯に切り替えたり、沖縄の別の地域に移ったりしました。壺屋は、今でも観光客、買い物客、そして沖縄陶芸の愛好家に人気のスポットです。